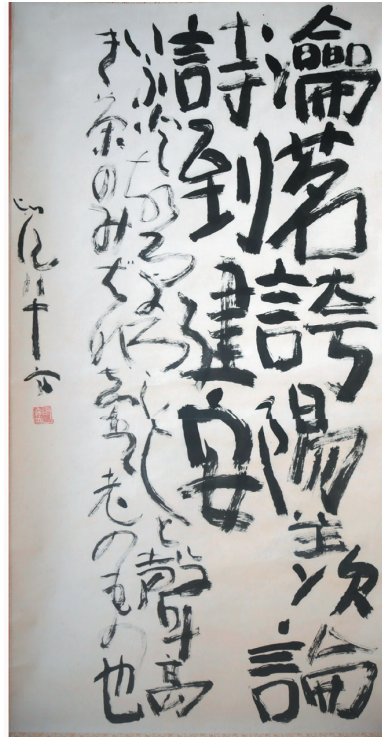


# 比庵佳境の会

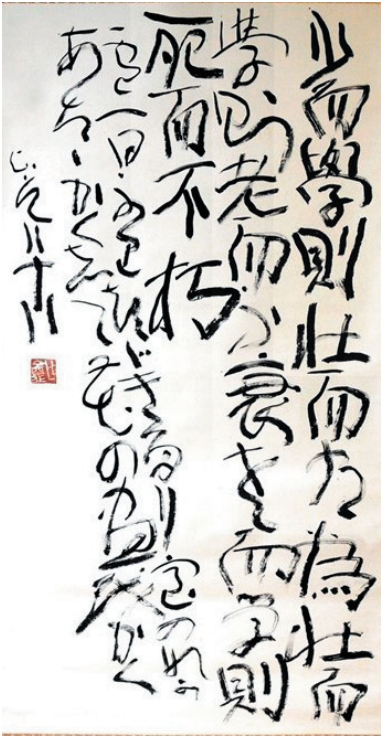
比庵の書 2題  
漢詩と歌の組合せ

論老誇陽羨 論詩到建安  
いふところ よろしよろしと  
聲高き 茶のみばなしは  
老のものなり 比庵八十六

初冬月夜過子淑詩 吳偉業（明末清初の詩人）  
月色破林巒 明るい月が山の上にさし出る頃  
貧家共一灘 清貧の子淑の家に来てみると早瀬のそばにあった  
門開孤樹直 開かれた門の前に一本の樹がまっすぐに立っていて  
影遍両人寒 月影がさしこみ二人を寒々と照らす  
論老誇陽羨 茶を煮ては陽羨の銘茶を味わい  
論詩到建安 詩を論じては建安の詩を良とする  
亦知談笑久 こうして談笑がいつまでも続き  
良夜睡應難 この良き夜は眠ることはできないだろう



小而学則壯而有為 壯而学則老而不衰 老而学則死而不朽  
雪一日ふりつづきたり室のなか  
あたたかくして花の畫をかく  
（小而学 佐藤一斎 言志四録）  
比庵八十八



清水比庵・第二のふるさと  
備中「笠岡」を歩く

現日会第六代会長 故城所湖舟

この寄稿文は旅が好きで比庵ファンであった故城所湖舟（きところこしゅう）氏が平成十三年に旅の読書雑誌「凌霄」に寄稿したものを前号（第十号）に続き転載したものです。城所氏の略歴は次の通り。  
一九三〇～二〇一七、横浜国立大学名誉教授、現日会六代会長（この寄稿文記述時は常任理事）、毎日書道界参与ほか書写教育に尽力

笠岡は岡山県の西南部に位置する市です。大正十二年関東大震災のため、妹章子さんのいる笠岡に一時仮寓します。これが生涯にわたって笠岡との縁が生まれた初めとなり第二の故郷となります。

昭和十九年六十二歳の時、戦禍をさげ笠岡に疎開、笠岡高女で作歌の指導をしていた。戦後は東京駒込の娘明子さんの家に移るが、妹章子さんの死去の昭和四十年のころまで、夏の四ヶ月は笠岡で過ごすのが恒例となりました。

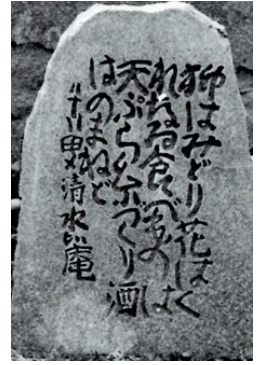


威徳寺前景

昭和十七年に妻鶴代さんを亡くし、昭和二十九年には妻を追慕して、笠岡の威徳寺に、めおと墓を建立します。

こんなわけで比庵半生のゆかりの地に笠岡がなつたのです。笠岡は比庵芸術の香りと、なごりをとどめる町になったわけです。

まず市立図書館



図書館前の歌碑

で車をおり、あたりを見渡すと、道路脇の植込みの前にそれらしきものが目に入った。近づくと「柳はみどり花はくれなゐ、食べものは天ぶら糸づくり酒はのまねど」の比庵碑が鮮やかに浮かんできました。

ほりの深い自然石の文字は、行がからみあって、楽しく踊っているようでした。自詠の歌や、自分の生活感情を素直に表現すると、書はびったりと、おさまり生きてくる。墨場必携など見て書いても、書は生きてきません。

タクシーをひろって小高い城山公園に向かう。自然林に囲まれた小道が頂上まで続く。やがて広場に出たが、そこが公園で左の低い

城山の上の廣場にたゞ射せる朝日より見る海のある町  
八十夏清水比庵



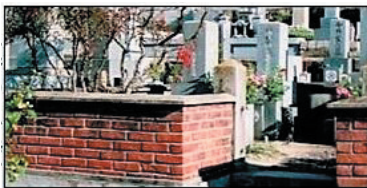
城山の歌碑

松におおわれて、茶褐色の比庵独特の歌碑がたつ。笠岡の町越しに青い海が見渡せる絶景の地を詠んだ歌でした。あたたか味のある拡張の高い翁の独自境——仙境の趣を感じました。

城山を後にして、比庵夫妻の墓地にむかう。駅裏の小道を古い落ち着いた家並みの先が威徳寺。

古刹にふさわしい山門をくぐると、本堂の右前に比庵碑があり、左の鐘楼に弟の三溪揮毫の鐘銘が見られます。訪れる人もなく閑寂清雅なお寺でした。

本堂脇の小庭をすぎると、山を開いた墓が階段状に並んでいる。赤レンガの囲いのある墓と聞いていたので、墓地中央部の墓はすぐわかりました。中央が父母の墓—清水質夫妻之墓—右の縦長の石には梵字の下に「大円鏡智」とあり比庵の戒名—清光院殿比庵禪徹大居士高頭塔が立つ。その右が比庵自筆の「清水比庵夫妻之墓」が立つ。墓碑側に妻



清水家のレンガで囲まれた墓



比庵夫妻の墓

鶴代の追慕の歌が刻されています。

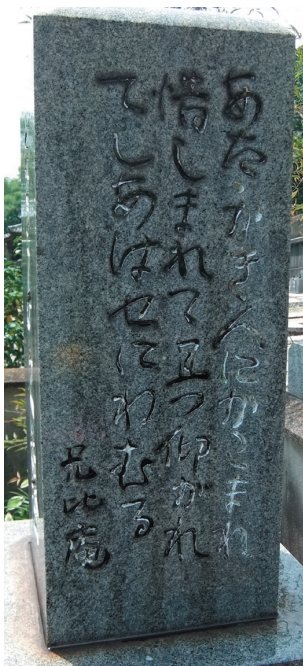
左には「童子之墓」—ここにも比庵の挽歌が刻まれています。歌碑と違って、太字で一つ一つ、思いをこめ永遠の冥福を願う恭謙の情が深々と刻されていた。



比庵作成の墓碑

まだかなる夢をむすぶといふこと  
いかにまどけきものにあるかも  
比庵

予定より遅くなり、笠岡グランドホテルに泊まる。ホテルの二階にある「ワコーミュージアム」に「比庵展示室」が平成十二年にオープンしたので、見ないわけにはいかない。笠岡ゆかりの芸術家たちの絵画、彫刻、陶芸、書が展示されています。それも超一流の人たち。比庵の書は二八点。どれも楽しくはしゃぎまくっていました。



妹章子の墓碑

あたたかき人にかこまれ惜しまれて  
且つ仰がれてしあはせにねむる  
兄比庵

# 清水比庵の書の感想

岡山市立西大寺公民館書道講師

杉本頼子

清水比庵先生の書について、私が学ぶ比庵作品の中から四作品を選んで自分が受けた感じ方を記してみました。作品は見る人によって受け取り方も違うので他の人はどのよう感じるのか聞いてみたいですね。

## 一文字書「和」

意の如くなごやかに、おだやかに表現されていて、柔らかな線の動きと青墨らしき墨色との融合に、見ていて憩うという安心感を与えてくれる貴重な作品です。落款の大胆にして九十一歳という健康的な身体であることを想像させてくれます。傍の大きな口は皆で心を繋いで大きな輪となると読み解けばよろしいのでしょうか？その側に朱印を押し華やかさを添えているのでしょうか。

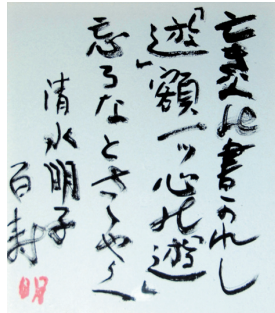
一文字とはいえ、多くのことを語りかけてくれる作品といえます。

和 比庵九十一



一文字書「遊」  
この書は一人娘の明子様が自宅にはもちろん、後に入所先ホームの自室までお連れになって一〇〇歳を超えても傍において見守っていらつしやうと伺っています。そして今は大海を渡りカリフォルニアの地に住まれ、明子様の想いを継ぐ孫娘のワデン充子様が続いて行かれたそうです。滑るような曲線は何とまろやかな趣を醸し出し、柔らかくゆつたりとした雅味にあふれていることでしょう。遊びという心のゆとりを奨励してくれているようで、見るだけでウキウキとした心地に酔いしれるのです。

遊 比庵八十八



明子が百歳の時に  
書いた色紙  
亡き父の書かれし  
「遊」額一つ心の「遊」  
あゝなごまやかに  
清水明子  
百寿

## 熟語「山重水復」

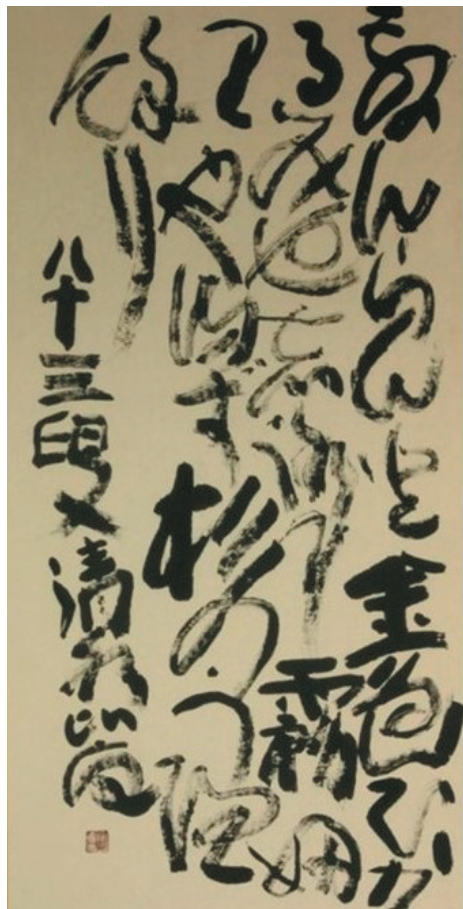
「山水は幾重にもなつて遠い自然のあるがままの姿である」という作品は、自由にして叙情性豊かに坦々と気持良く流れる線に表現され、格調高く見ることが出来ます。喝筆は清溪の水を通ず道の如く、爽涼感に溢れて妙を得て人の心を引きつけます。墨をしつかり含んだ滲みの線も気持ちを楽しんでくれるので、結局すべてが学びの宝庫であるのです。

## 日光東照宮奉納作品

日光東照宮三百五十年祭（昭和四十年）を記念して奉納された作品の一つです。東照宮の荘厳とした佇まいの伝わってくる歌と書です。

さんらんと金色ひかるみやしるに  
霧ふりやまず杉のうえより

八十三叟 清水比庵



山重水復  
比庵九十三

天衣無縫なこの書は筆が動くままにまるで生きているかの如く紙に宿っていて、特別な呼びかけでもすれば飛び出してくるのではなからうかとさえ思える作品となっています。

## 終わりに

私も古希を迎えました。これからは比庵先生の「毎日佳境」を見習って毎日機嫌よく生きようように心掛け、一年一年を重ねるようにします。

以上

# ヒ舟（ヒシユ）から比庵へ

## その一 改号の過程

比庵佳境の会長

清水固

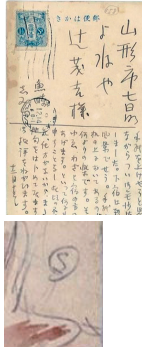
今年五月三十日から六月四日に東京大崎のウエストギャラリーで開催する清水比庵展に私の手元にある十一のヒ舟時代作品を展示する予定であるが、比庵は日光町長中、絵手紙よりもヒ舟の号で画や歌の作品を残している。それらは今日ではあまり世に出回っていない。

### 一 ヒ舟の号

比庵の号は最初「ヒ舟（比舟）」でその後比庵に改号した。ヒ舟と号したのは大正十年（三十八歳、古河銀行南船場支店長 兵庫県魚崎在住）のようだ。魚崎時代の作品でヒ舟と落款しているのは大正十年正月の作品が一点確認されており、十年三月に弟に出した絵手紙にもヒ舟と書いている。

それ以前の絵手紙のサインは清水のイニシアルであるSと書いたものが多いが、このころからはヒ舟の略としてヒが多く使われている。

大正9年12月 魚崎



大正10年3月 魚崎



る。

ヒ舟の号はその後、魚崎から横浜に移住し、古河電工日光精銅所勤務を経て日光町長になるまで使われており、ヒ舟時代は十五年間続いたことになる。

昭和十年（五十三歳 日光町長時代）に描いた作品に初めて比庵と落款を入れている。以後昭和五十年に亡くなるまで四十年間比庵と号した。

### 二 歌のヒ舟時代

比庵が歌（和歌）を知ったのは、中学校に上る頃家の本箱から古今和歌集遠鏡を取り出して読んだのが最初である。次いで中学三年頃に與謝野鐵幹の「明星」が出て鳳（與謝野）昌子の礼拝者になった。しかし孤独な性質である上に厳格な家庭に育ったからもあって文学青年にはならず、日記の中に歌を書きこむ程度だった。

大学時代には歌の友人花田比露思がいたが、俳人仲間引張られて俳句も作るようになった。卒業後銀行員になって各地に転動している間に友人たちに出した絵手紙には歌や俳句が書かれているものが多いが、この段階では号は持たずSのサインで通している。しかし俳句の生命としている句会というものが厭なので（体が弱い関係もあった）、三十八

歳（魚崎在住）の時俳句を止めた。このころヒ舟の号を使い始めているが、ヒ舟の名で俳句を詠んだものも残っている。

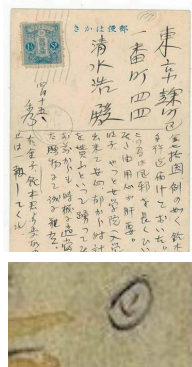
俳句を止めてからは万葉集に傾倒した歌を多く作るようになった。その後日光に転動となり、同時に万葉への転向以後の歌を集めて『夕暮』という小歌集を清水ヒ舟の名で刊行した。（昭和三年 四十六歳）

この年から日光町で二荒短歌会を主宰し、翌年（昭和四年 四十七歳）短歌誌『二荒』を発行した。同年会社（古河電工）を早期退職し、横浜の自宅に戻った。

翌昭和五年（四十八歳）日光町より懇望されて町長に就任し日光町に戻った。

昭和八年（五十一歳）歌集『朝明』を清水ヒ舟の名で発行。これは昭和三年から七年にかけて日光生活中の歌を集めたもので、前半は古河工場において、後半は日光町長としての作である。『夕暮』が先で『朝明』が後なのは、「自分は夕暮、朝明が好きだが特に夕暮が好きなのでこれを最初の歌集にした。」と後に語っている。『朝明』の表紙絵は、のちに比庵と共に日光市の初代名誉市民に選ばれた小杉放菴が描いており、歌集は当時の歌

大正10年4月 魚崎



壇の注目を浴びた。

### 三 まとめ

以上まとめると「ヒ舟」の号は殆どが日光在住中（古河電工社員及び日光町長）に使った号であり、歌を中心に活動した時代である。この間『夕暮』『朝明』の歌集を発刊し、短歌誌『二荒』を発行している。

また従来歌と俳句の両方を作っていたのがヒ舟となつてからは歌志向になった。

なお比庵が主宰していた短歌会の月刊誌『二荒』は昭和十四年比庵が日光町長を辞任するときに友誌「下野短歌」と合併して「下野短歌」となり、更に昭和四十三年（八十六歳）に「窓日」と改名されて比庵は主宰となった。以上

## その二 比庵の作品

比庵佳境の会会員

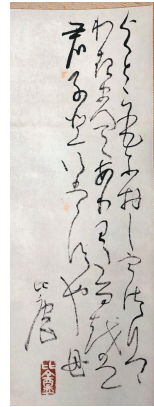
山本陽一

### 一 珍しい初期「比庵」の合作の書

今年の大崎ウエストギャラリーでの清水比庵展では今まで公開されなかった「ヒ舟」時代の作品も多く展示されるので来観者の反応が楽しみなのだが……と思っていたところへ笠岡の美術商豊池勇氏から、比庵の珍しい作品と出会ったが、ちよつと謎みにくいので、その作品のフアックスが送られて来た。

笠岡に住んだ南画の画家笹井二洲（一九〇〇～一九四七）と清水比庵の合作である。幅の狭い半折丈の紙面の三分の二に、二洲が、崖に下がる蘭とその左に二首の五言絶句を書き、その上部に賛のように比庵が短歌を書いている。

ここでは比庵の書（歌）の部分のみについてコメントをこころみるが、意味の切れ目で改行していて、観賞者への配慮が伺える。



よとともにおしうつりつゝ、  
わきまへてありわたるをば

君子といはずやも 比庵

と読める。「おしうつり」「ありわたる」と古語を用いて、抽象的な内容の歌だが、

時代と共に時勢がどんどん変ってゆくが、(その影響を受けやすいが)よく自分をわきまえて、ずっと真念を通して生きる人こそが有徳者(人格者)というものです。

と意識してみた。二洲が書いた五言絶句の内容にも呼応する歌で、また、二洲その人の生き方をも暗示する歌かもしれない。と共に比庵の生き方でもあるだろう。

その書風は初句から「ありわたる」までは字形は小さめで、三々四字の連綿を交えつつもおとなしい変体仮名であるが、そのあとは、後年の比庵調の奔放さが顔を出している。落款の「比」は小さくきちんと、「庵」を縦長にした形は、「比庵」初期に見られる形である。三行の上部で息をためて、息長く書き下して線質は正に歌っているようだ。比庵は七十歳代前半までの作品には年齢を入れていないので、制作年は特定し難いが、清水固氏は「比庵が笠岡に疎開中で、二洲と親しかった昭和二十一年(比庵六十四歳、二洲四十七歳)頃の作品であろう」と推測している。

## 二 「七舟」時代の作風

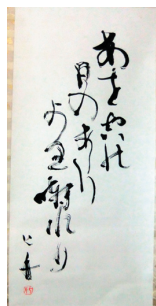
冒頭で触れたが今年のウエストギャラリー「比庵展」に、七舟時代の書画作品が多く展示される。それらに触れつつその書風、画風もコメントを試みる。

1 半折縦いっぱいに描いた「富士山」  
八十歳以後の、いわゆる比庵富士とは大いに異なる趣。よく見ると頂は三つに見えるが、四つか。歌は上の句を上部に、下の句を山裾に行草でおさめる。呼吸の長い明るい線。墨のみによる。爽やかな風が吹き下してくるような富士山。

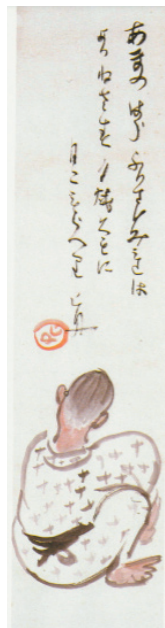


初日影もあそび居る心もて  
ながめてありぬ玉のごとくに 七舟

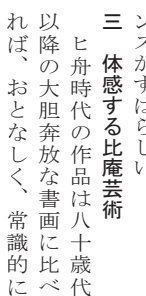
2 俳句「あを空の」  
大きめの字だが、いわゆる比庵調の奔放さではなく、しつかりと筆を誠実に紙面に下している。気宇壮大な句。



あまのはらふりさけみればあかねさす  
夕焼くもに月こもらへり 七舟



3 「あかねさす」  
半折の上部に短歌を、下部に比庵の自画像と思われる後ろ姿を描く。夕涼みか。短歌の書風は八十歳以後の大胆な書風に比べると別人のように小さく、誇張のない仮名書法である。しかし古典の臨書風ではなく既に「比庵の書」になっている。「あまのはらふりさけみればあかねさす」は枕詞も使った万葉調。画は人物を描いた絵手紙の調子で、体の線をよくとらえ、後ろ姿ゆえに、くつろいだ気持ちのはつきり伝わってくる。後ろ姿にしたセンスがすばらしい。



三 体感する比庵芸術  
七舟時代の作品は八十歳代以降の大胆奔放な書画に比べれば、おとなしく、常識的に見えるかもしれないが、線質の呼吸が長く、従って明るく、こせこせしない。だから、後年大胆な芸風が展開できたのである。また、七十歳代前半までの比庵作品には年齢が入らぬものが多いが、八十歳以後と異なる句いやタッチがある。はじめに触れた「よととも」の歌の線質にも、体に伝わってくるリズムの流れがある。比庵の書画は、単に見るものというより、体感するものである。

「比庵」前期の作と思われる新婚を寿ぐ「えをとこは」の二羽の雀を描いた作品は、ぽきぽきとした線をほぼ垂直・水平に組んだ明るい結体の字と、微妙に違う大きさの二羽の雀の幸せそうな画とが調和している。書作品としてみても佳品であるが、下に雀が入って渾然とした世界となった。



えをとこはえをとこを得つ  
えをとこめはえをとこを得つ  
千代に茶えむ 比庵

以上

## 清水比庵の歌(六)

「窓日」編集長 秋葉 貴子

年明けて八十八歳すこやかに  
柳はみどり花はくれなゐ



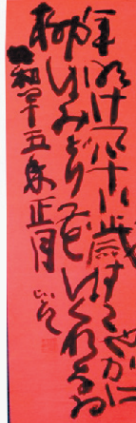
清水比庵は明治十六年二月八日、現在の岡山県高梁市に生を享けた。たまたま旧暦の元旦であった。本名は元且生まれの豊臣秀吉に因んで「秀」と命名された。掲出の歌は昭和四十五年、心身健やかなうちに、八十八歳を迎え感慨を込めての作と思われる。同じく次のような歌もある。

旧元日日の出に生れ秀といふ  
名さえめでたき弱虫泣虫なりき

そしてまた、弱虫ゆえに用心して長生きをし、泣虫ゆえに、歌詠みになった、という歌もある。生涯みかけは華奢な体躯であったと思う。

八十八歳「米寿」この歌に於いては、その健康を自認し「柳はみどり」「花はくれなゐ」と、自らを称えた、そこには比庵の心意気が偲ばれる。

比庵八十八歳の頃は最も芸術の境地盛んな時代でもあったと思うし、この上句を受けた下句からは、その覇気が伝わってくるようにも思われる。



年明けて八十八歳すこやかに  
柳はみどり花はくれなゐ

昭和四十五年正月 比庵

# 清水 固先生と私の 「おにぎりの出会い」

現日会副理事長 藤田 紅子

昨年夏、私達書道団体「現日会」は「比庵の書」と題して清水先生に講演をお願いした。その時の昼食で上等のお弁当をたべているのにも拘わらず、私が早朝に高知より作って持って来たおにぎりを固先生に「一つ食べてみてください。」とお勧めしたのを、先生は食べて感動して下さり、高知に行く機会が秋にあるので、その時にもこのおにぎりをとアンコールされた、その事がきっかけで本寄稿文の話へ繋がったのです。

十月二十二日待望のその日がやって来て、高知龍馬空港へお迎えに行った、固先生、東京やアメリカの妹さん、鎌倉の娘さん、書道家や絵手紙の先生又わが現日会の平岡さん、私の総勢八名で昼食は待望の「かつお船」という名店だ、目の前にワラで焼いた極上のカ



陶板画の前で  
筆者

テレビ高知  
新社屋ロビーを  
飾る陶板画  
黒潮の太平洋の  
春風の二月岬の  
椿花咲く  
比庵



レストラン「かつお船」で  
同大喜び  
で初体験  
に満足。  
ペロリと  
舌つづみ  
をして桂  
浜の龍馬  
記念館へ  
とドライ  
ブ、その  
あとは市

内に帰り、宿泊のホテルで一休みした、夜はかの有名な「はりまや橋」のすぐ近くの得月楼という、作家宮尾登美子さんの映画にもなった老舗の料亭で、テレビ高知社長様、専務様方ご招待の会席膳。

「テレビ高知」開局時に清水比庵先生の全国で唯一の大作陶板画が作成され、今回の第一の目的は、その陶板画がテレビ高知社屋改築で新社屋のロビーに移転されたのを拝見に来たのだ。明日はその作品を見るのが楽しみで、比庵先生の逸話やおいしいお酒、お料理、秋の夜長の楽しいひとときもアツという間でした。

いよいよ翌朝、九時半という時間にも拘わらず、テレビ高知の重役様の大歓迎、私達高知現日会のメンバーも、新社屋の陶板を見て新たな気持ちとなった。

黒潮の太平洋の春風の二月岬の椿花咲く  
壁面三〜四m、高さ三m位の天井までの大作、足摺岬の見事な椿が一面に、それぞれの顔をして表現されていた。「きれいな比庵」と自称されたように、紅い椿は私達を迎えてくれた。その模様は夕方のテレビニュースとして報道されていたのだ。

後ろ髪を引かれる思いで固先生との一行は一路岡山県笠岡市へと高知駅を後にした。私も結局熱心なお誘いを受けて同行することになり、総勢九名の旅で車中昼食はお約束の

おにぎり弁当となり、列車の中は和やかでした。

笠岡について古城山の歌碑を始め、さまざまの歌碑めぐりをして一同笠岡グランドホテルに入り、その中にあるワコーミュージアムの比庵作品展示室の作品を拝見しました。ワコーミュージアムは比庵作品を多く収蔵しており、順次入れ替えをしているといわれ比庵ワールドを拝見、それぞれが素晴らしい線が生き生きして、今ここで比庵先生が描いたかの如く臨場感あふれる作品群に私は驚嘆いたしました。

夜は三洋旅館で比庵先生の屏風や窓日彫の膳で会食を頂き、昔懐かしい顔ぶれも集まって先生達と話は尽きない旅となりました。食することも多かった一泊二日でした。皆様との再会を願い乍ら私は次の朝笠岡を出発しました。皆様のご健康とご多幸をお祈りしながら感謝感謝です。以上

## 今後の比庵展のお知らせなど

墨の美術館での比庵展

「未発表作品を中心に」

会期 二〇一九年五月十九日(日)〜二十六日(日)

午前十一時〜午後四時

会場 横浜市青葉区「墨の美術館」

関連行事 参加申し込みが必要です。

・五月十九日(日) 午後一時〜三時

テレビ高知の陶板画 現日会・平岡常依氏

清水比庵と西林邸 墨の美術館・濱崎道子氏

・五月二十二日(水)

比庵茶会 午前十一時〜午後二時

(茶会は別料金です。)

・五月二十五日(土) 午後一時〜三時

比庵の正月 比庵佳境の会会長・清水固氏

比庵の思い出 比庵の孫・ワーズン充子氏

参加申し込みはメールまたはお電話で

〒三二七〇〇四七 横浜市青葉区みたけ台  
十一―十三「墨の美術館」濱崎道子  
電話 〇九〇―三四三九一五〇一四  
Eメール jmh02hanasaka@gmail.com

## 第三回ウエストギャラリー清水比庵展

会期 二〇一九年五月三十日(木)〜六月四日(火)

午前一〇時〜午後五時三〇分

会場 東京都品川区大崎三三六七―三F

「大崎ウエストギャラリー」

Eメール to.hanasaka@getgami.co

電話 〇三―三四九〇―四一七七

関連行事

・五月三十一日(金) 午後一時〜二時

「比庵から比庵へ」清水 固氏

無料ですが参加申し込みが必要です。

電話またはEメールでお願いします。

## 高梁比庵会「比庵大賞」について

高梁比庵会に問い合わせたところ「比庵大賞」実施の決定は四月の大会で決まるので、現時点では未定との事でした。十一号会報ではお知らせできないので、ご希望の方は高梁比庵会にお問い合わせください。

(〇八六六―二一〇一八〇)

## 会費納入のお願い

31年度の会費を下記に納入されますようお願い致します。

一口、1,000円(複数口歓迎)

三井住友銀行鶴見支店普通 7061558

名義 クボタノブユキ

### 比庵佳境の会

会長 清水 固(清水比庵の孫)

〒247-0022 横浜市栄区庄戸3-5-18

TEL&FAX 045-893-8932

URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>

幹事: 比留間 哲生

〒247-0022 横浜市栄区庄戸3-25-7

TEL 090-4608-0488